ナウフ・アルベンダー・サウード王女
（サウジアラビア王女・Lahd Gallery代表）

イギリスのインペリアル・カレッジで臨床医学の博士号を取得。そして、20歳にしてMENASA（南アジア、中東、中央アジア、北アフリカ一帯の地域）の若手アーティストを中心に扱うLahd Galleryを立ち上げ、今年で10周年をむかえる、ユニークな経歴を持つナウフ・アルベンダー・サウード王女。今春、アートフェア東京に合わせて来日した際にお話をうかがいました。

――まずは、ギャラリーの10周年、おめでとうございます。王女でありながらギャラリーを運営されているのはとてもユニークなことだと思いますが、きっかけは何だったんでしょうか？

王女 ありがとうございます。内科系の研究をしていたのですが、多くの友人や協力者に出会って、サウジアラビアの女性アーティストに発表の場がないことを知り、彼女たちを応援したいと思ったのです。サウジアラビアには、2006年にアート・ドバイがはじまるまでは、コンテンポラリーアートの場はなかった。それがこの10年で随分変って、盛り上がってきましたね。私たちはその先駆けと言えるでしょう。今は、男性のアーティストも含め、ローカルの若い作家たちを国際的に紹介していくことに重点を置いています。

――今回は、どうして東京にいらっしゃったんですか？

王女 実はアートフェア東京をそれまで知らなかったのですが、その存在を知って興味を持ちました。社会的、経済的な側面においても東京はロンドンに並ぶ街だから、そのアートシーンはとても気になる。日本ならではのサブカルチャーの影響もあるし、興味が尽きないですね。

――ギャラリーの運営はオンラインが主だと聞きました。

王女 そうです。サウジアラビアとロンドンに二つのオフィスがあります。中東と欧米の行き来は、アジアとヨーロッパの行き来より難しいもの。だからオンラインが都合がいい。その分、アートフェアに参加したり、ギャラリーで共同展示を行ったりと、ポップアップの展示を世界各地で行っています。

――扱われている作家について教えていただけますか。

今は10人のアーティストを扱っています。特に活躍しているのはシリア出身のAnas Homsi。87年生まれの若手ですが、国際的な人気を得ています。

古典が現代アートの源泉になっているのはどこの国も同じですが、サウジアラビアのアートは、自然からインスパイアされることにおいて、日本のアートに通じるところがあると思います。MENASAの作家も注目を集め始めていて、アーティストはそれまで社会的なキャリアとして認められなかったけれど、それも変りつつあります。

――先日、ゴーギャンの作品をカタールのコレクターが約3億ドルで購入した話題がありましたが、中東の市場についてはどう考えますか？

中東ではオークションも増えて、美術市場も発達している。中国やロシアもそうでしょう。でも、私はセカンダリーの市場にはそこまで興味がありません。エマージング・アーティストと出会い、着実に基礎を築いていきたいですね。10年のあいだ医学の道を歩んできましたから、研究者の気質なのでしょう。

私は、何のために働いているのか、ということより、何故私と働いているのか、ということを大事にしていきたいと思っています。中東は市場のことだけでなく、作家たちも徐々に育っています。アートが好きな人も、私を含め多くいて、家で飾って楽しんでいる。家に人が沢山来て、皆でご飯を食べるという文化だから、そこで見せる場面も多い。日本はもっと慎ましいですよね。

（3月20日、都内某所にて）

Anas Homsi「Destiny」

Wadia Boutaba「Untitled 1206」